



企業と NPO の協働フェスタに、 参加しました。



2012年1月20日(金)きらっ都プラザ(京都産業会館)で開催された「企業とNPOの協働フェスタ」に参加しました。この催しは、一般社団法人CSRプラットフォーム京都が主催したもので、環境保全の取り組み、地域福祉への貢献、子育ての支援、国際協力など、さまざまな社会的課題に取り組むNPO等の地域活動団体と、企業が一緒に取り組むための出会いの場を提供するものです。

当日は、分野ごとに分けられた会場ブースを出展し、来場する企業関係の

方々に当センターの活動を売り込みました。

当日の来場者は400名。当センターのブースには10名ほどの方にお越しいただきました。過労死や働きざかりの男性の自死の割合が増えている今、居場所となる企業の皆様が、当センターの存在を意識していただくことは重要なことだと感じています。企業と当センターが手をとって、社会を支えることができれば、今よりも生きやすい社会になるのではないかと思います。

このような催しに参加するのは当センターでは初めての経験でしたが、さまざまな方に当センターを知っていただく良い機会になったと思います。今後もこのような機会があれば積極的に参加する予定にしています。



被災された方の〈こころ〉を支える。



当センターでは、東日本大震災の被災地支援として、被災された方の気持ちを聴くことのできるボランティア育成のための講座を開催し、現地で活動できる人材の育成をしています。被災地支援にいたった経緯と現状を今号から連続でご報告させていただきます。

(代表 竹本了悟)

◆東日本大震災を知って

昨年3月11日に起こった東日本大震災は、関西に居る私たちにとっても、とても大きな衝撃と強い影響を与えました。日々伝わってくる沢山の情報は、被災地で苦悩を抱えておられる方々のことを想像するに十分なものでした。そして、それらの情報を聞く度に、居ても立ってもいられない気持ちにさせられました。

私たち相談センターに、何か具体的にできることはないだろうか、あるならば積極的に関わりたい。一方で、今の相談センターは、まだまだ開設したばかりで、十分な体力がない。このような状況で新たな活動をするのは、本来の目的である、自死にまつわる苦悩を抱えた方の苦悩を和らげることがなござりになってしまうのではないかと、そんな、自問自答の日々を過ごしていました。

そんな中、当相談センターを支援して下さる方々の中から、「ぜひ、相談センターとして被災者の方々を支援して欲しい」という声をいただきました。当相談センター本来の活動をこれまで通り行なう目途が立ち、できることがあるならばやろう。支援して下さる方々の声に背中を押されて、被災された方々と積極的に関わりを持つ活動をはじめることになったのです。

◆居室訪問活動のきっかけ

私たちの支援団体の一つである浄土真宗本願寺派（西本願寺）は、震災後、かなり早い段階から東北の地にボランティアセンターを開設し、多くのボランティアを受け入れ、被災地支援の活動を行なっていました。その現場からは、被災された方の心を支えることの必要性を訴える声が増え、強くなっていったようです。こうした声を背景に、西本願寺から当相談センターへ、心のケアを担う活動についての要請が届きました。そこで、西本願寺と協力しながら、被災された方の心を支える活動の一步を踏み出したのです。

まずは、当センターとして具体的に何ができるのかを模索することから始めました。メディアを通して伝わってくる情報や現場の声から、仮設住宅に住んでおられる方々の中に、死にたいほどの苦悩を抱えている方が多く居られるということが分かりました。居室からでることもなく、仮設住宅内での催し物にも参加できていないようでした。このような状況で関わりを持つためには、こちらから訪問することが必要だと結論に至りました。

しかし私たちには、積極的に居室を訪問してお話をうかがうということは、経験したことのないことです。もしかしたら必要とされていないのではないかと、方言があるからきちんとお話を聞けないのではないかなど、様々な不安がありました。それでもまずはやってみようと、面談経験の豊富な相談員が中心となり2人一組で仮設住宅の一軒一軒のお宅を訪問してみました。

日々の活動と全く同じ。 大切にすることは、

◆はじめての訪問

〈コンコン〉「こんにちは、ボランティアです」。はじめて訪問したお宅は、1人暮らしの40代女性でした。しばらくして、ゆっくりとドアを空け「はい」とだけ答えられました。「いかがですか？」と声をかけると「皆さんが良くしてくれるので、大丈夫です」とだけ仰って、しばしの沈黙。「ここでの生活はご苦労も多いのではないですか？」とお伺いすると、東北弁でポツリポツリとご自身の心の内をお話になったのです。震災で多くの物を失い心にポツカリと穴が空いている、震災以前からうつ病を抱え眠れずに苦しい、仮設では周りの人と話をしないので孤独だ。死にたい気持ちもお持ちでした。時間と苦悩を共有し、小一時間ほど経ったころには、最初に訪れた時のしんどそうな表情から随分とやわらかい表情に変わっていました。本当に不思議です。話している内容は、苦しみや悲しみなのに、帰る時にはやさしい笑顔まで向けて下さいました。

私たちの日々の相談活動と全く同じだったのです。相談センターで大切にしている姿勢で関わりを持てば、被災された方の苦悩を和らげることができる、と確信を持つことができた経験でした。その後も、多くのお宅を訪問する中で、この確信を深めていくこととなったのです。

※被災地での活動は次回も引き続き報告する予定です。

次号は、仮設住宅居室訪問活動における私たちの基本姿勢と方策の全体像についてご報告いたします。

被災地ノート ③ 被災地支援活動～仮設住宅居室訪問活動の現場から～

仙台にある東北教区ボランティアセンターで、当センターが主体となって、【居室訪問ボランティア養成講座】を、これまでに二度、開催した。

養成講座の参加者は、「気持ちを受け取る」ということを、相談員・相談者に分かれてのロールプレイを通して、体験的に学びとっていく。自分と相手との間にやりとりされる言動や感情に、参加者全員で意識を集中する。

たとえば、相手と対峙して、「こういう場合は、こう対処すべき」という、さまざまな知識を持っていたとしても、そこに気持ちがかもっていないければ、言葉は上滑りし、お互いの心の触れ合いが見られることはない。それは、周りで見ている人間にも、しっかりと伝わる。

二人のやりとりを見ていた周りの者との「ふりかえり」は、「気持ちの動いた言動」「会話の中の沈黙」「しぐさや声のトーン」など、多くの気づきや学びを共有する場でもある。

こうした「ふりかえり」は、実際に居室訪問活動を終えた後にも行っている。相手の言動や心の動き、同時に自分の言動や心の動きを、ロールプレイすることで、その場の全員が再確認、再点検をしてゆく。こうした作業が、活動を意義深いものにしてゆき、ひとりひとりの経験ともなっていく。

今後も、養成講座を通して、また実際の活動を通して、ひとりでも多くの方と、気づきや学びを共に深めていきたいと思う。ひとつでも多くの「ひとりぼっち」と共にあるために。

(ボランティア2期生 A.C.)

今月のことば

いつも前向きでいる必要はありません

(藤澤克己『いのちの問答』幻冬舎)

Sotto レビュー

『弱者の居場所がない社会』



阿部 彩 著
講談社現代新書

「電話相談って本当に意味あるの?」と訊かれたことがある。「仕事がないなら就労支援を、「体が痛くて動けない」なら医師を紹介する。もつと直接的な支援が必要では、という質問だった。「たしかにそうだ」と感じながら、「でも少し違うんだなあ」と思う。

本書は、近年注目されている「社会的包摂」という社会保障政策の概念にたいする良質の入門書だ。人を生きづらくさせているのは、お金や仕事がないこと、それ自体ではない。仕事なくなることは、会社という「社会」から追い出されることを意味する。社会保険の枠組みから脱落し、住居を失ったり人間関係を保てなくなることもある。こうして徐々に社会から切り離されてしまう。「包摂」とは文字通り「社会につつまこむ」システムである。

研究者である著者は、ホームレス支援のボランティア活動の現場に身を置かなかで、たとえ路上生活をしていたとしても、その存在そのものが認められる「居場所」があることによって、本当の意味で人が生きていけるということに気づく。

「居場所」がないこと、安心して休める場所がないこと、「そこに入れてもよい」と社会から認められる場所がないこと。「居場所」は単に雨や風をしのげるといった物理的な意味だけでなく重要なのではない。「居場所」は、社会の中での存在が認められることを示す第一歩なのである。社会を学校の教室にたとえれば、そこに、自分の「いすど机」がある。それと同じことである。

その人が、そのまま、そこいても良いこと。そのまま承認される場があること。私たちの電話相談も、それを目指している。(NS)

活動報告

- 電話相談件数…91件 (12月期)
- 相談活動委員会
グループ研修 12月21日(水) 参加者20名
- グリーフサポート委員会
グリーフサポート会議 1月12日(木) 10名
- 啓発活動委員会
啓発活動委員会会議 12月14日(金) 参加者6名
街頭活動 12月27日(金)

寄付ご協力一覧 (敬称略・順不同)

(2011年12月23日～2012年1月20日)

ご協力にこころより感謝いたします

浄土真宗本願寺派	故選義浩	広島市・善正寺
株式会社エクザム	釋恵子	黒田義道
葛野洋明	内海智之	黒田優美
源照寺	中平了悟	田中大真
竹本宣子	中平未紀	岡本よし子
土合晃祐	今井庸子	禿定心
小林忠直	南昌宏	八橋大輔
小林秀明	玉田義幸	山本浩信
郷原徳照		
富山市・正興寺 (原智精)		
小樽市・真正寺 (上野正範)		
街頭募金にご協力いただいた皆様		

●支援方法

賛助会員 年間1口3,000円
寄付 金額は問いません
法人会員 年間1口10,000円

●会費・寄付金振り込み先

郵便振替 ゆうちょ銀行 [振替口座] 00950-0-271875
他行間 ゆうちょ銀行 [当座] ^{ゼロキョウキョウ} 〇九九店 0271875

●現物によるご寄付も助かります

(例) えんぴつ、模造紙、付箋、ホワイトボードマーカー 等

Sotto コメント

今月もいつものように京都タワー前で街頭活動を行ないました。さすがに京都の1月は寒く、30分もすると、体全体が冷えきって、手がかじかみ、思うように声も出なくなります。何とかホッカイロでしのぎながら立ち続けていると、募金をしてくださった方から「がんばって!」とエールをいただきました。その言葉には、ホッカイロの何倍もの効果がありました。(N.Y.)

発行 2012年1月

特定非営利活動法人 京都自死・自殺相談センター事務局
〒600-8349 京都市下京区西中筋通花屋町下ル堺町92
TEL 075-365-1600
URL <http://www.kyoto-jsc.jp>
E-mail so-dan@kyoto-jsc.jp